繪本女今川 全

Hokusai
13

183

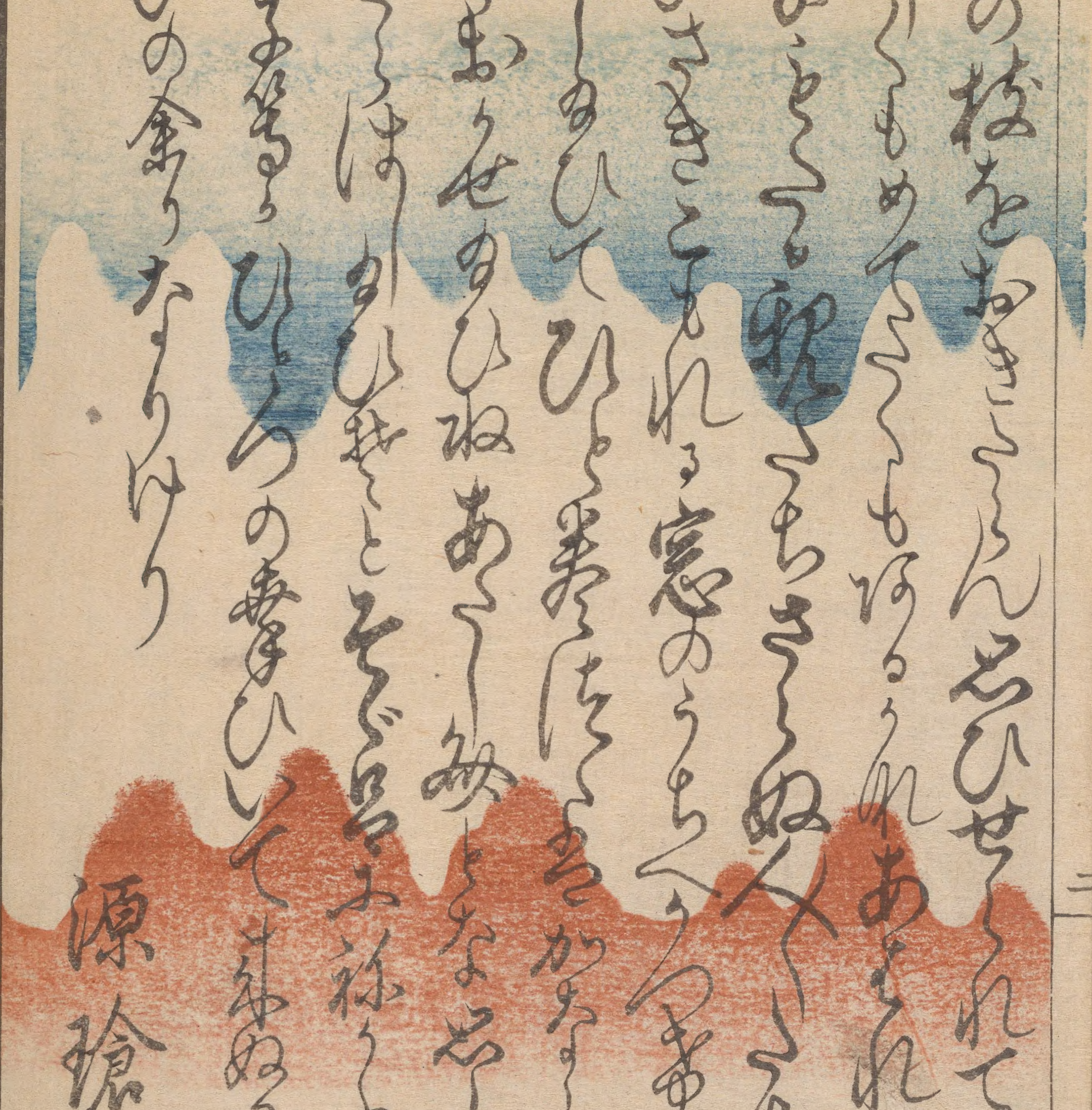
夫て世の女ハ成るまては父母に
ま嫁して夫の家に行舅姑に仕へて拙
学ふへき事も多けれは何ことも満く
いとけなき時よりまなひ知れは其件
のたまはぬより先に心をよく務させつ
何ゝの所作とあつかふにぞいとも
うるはしき様もしるへき女の書の学ひ
てかくとしきさふくきとのふたん
古の人もちくさしあきつまとも何かも

まさきは絵志つぬるもむねに心にゆるまき
にしてわれはふるふるかうる絵さやうはあれ
ことはしふさりいでたるへとえへき書
もちろん河仏の花の庭のたのしみ
乳母のさうしたんとそ候んとすべきものに
あれと中ころ此世の女はきたれども
仮名と気ふたりしりうたぬもすれみて
それまさ大きの人に志られさるとかく
むかし世舞志つふうの人形て書きて
かの守徳の君はちよしの綱になりひて

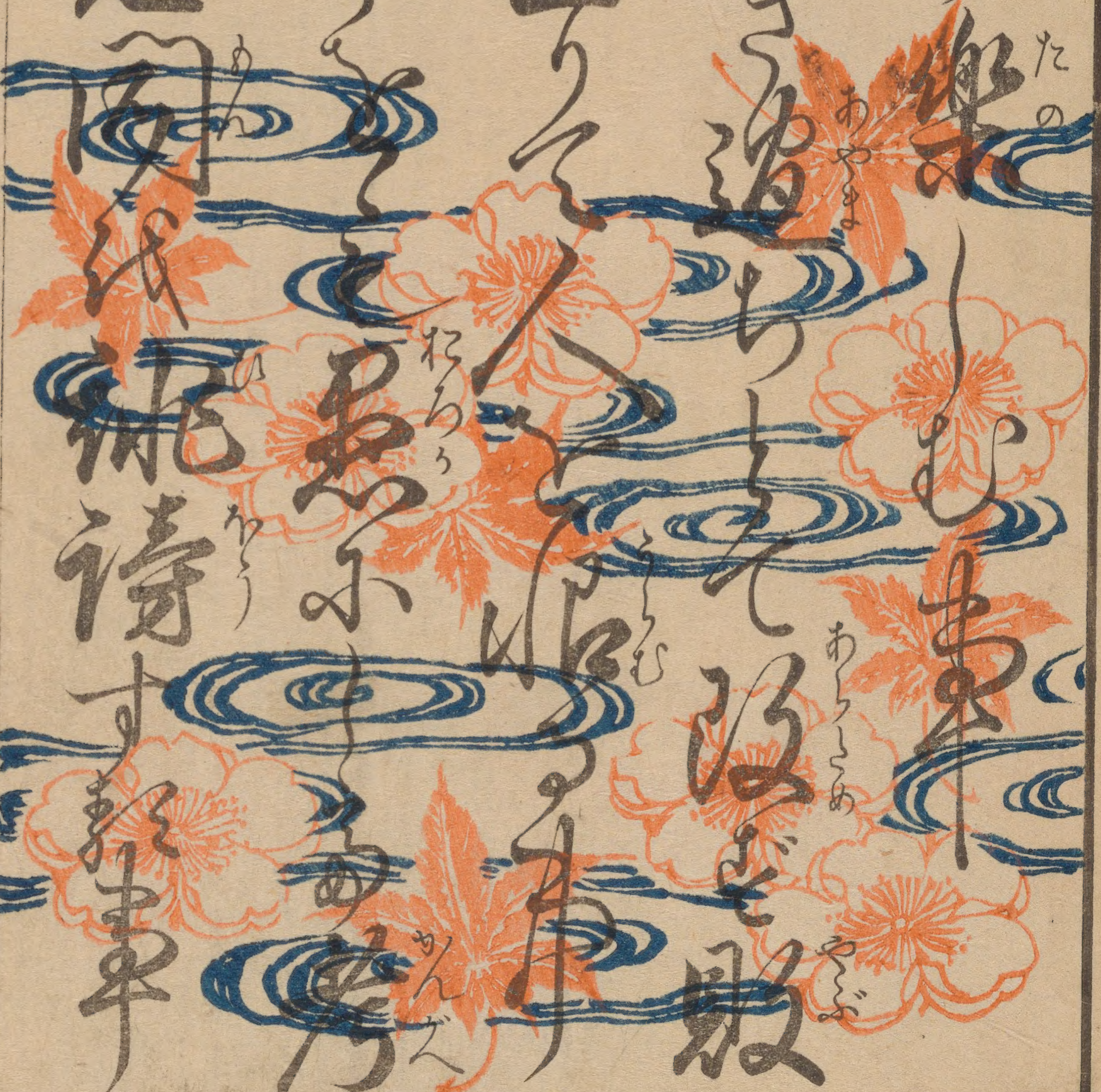
つゞましやかにいはゞ婦女にこそ仮名志ら
ひし女はめれもいまの世のをとめらの
ためにとてまうけたらしのがれきみて
手をならふ初より讀せなし書せなして
るもの仮名を志らせはそゑことにはなれり
みなおのづからよしあしのまさきまへを
志るたよりとなりて取意めやすからぬ
べきことの手習さらにまことに仮名をかく
上手の名を揚させかんなをさへ絵てあら
ふ名を出せる世まで永る錦の上に

花の梢をおしきこらん心ひかれてうる
はしくもめでくもはるられあはれ世の
中をとる歌よちさしぬ人くさも
おひさきこもれる窓のうちへつまとの
ふもしあひてひと男たくさかたすなよ
さしおり世すひねあくし然とな心し
まさうはかし秋とそなお称うつも
めのそ事をひとつの舞ひして来ぬるよう
まひの余りなりけり

源璟



舞(まい)楽(たの)しむ事
一 少(すこ)しき道(みち)にても過(あやまち)を改(あらため)ず敗(やぶ)
まてよりて人(ひと)の非(ひ)を用(もち)ゐむ事
一 小事(せうじ)にても妬(ねたむ)ふかき毒(どく)姦(かん)
形(かたち)見(けん)面(めん)飛(ひ)詩(し)す事



一 大事(だいじ)とても猥(みだり)にかたくうちとき人にゆめも語(かた)らぬ事

一 主親(しうおや)の志(こゝろざし)深(ふか)く恩(おん)を忘(わす)れぬ事

一 忠孝(ちうかう)の道(みち)疎(おろそか)にかすまじき事

一 夫(をつと)をうやまひ兄(あに)を敬(うやま)ひ申(まう)すべき事

一 天道(てんとう)を恐(おそ)るべき事

一 道(みち)に背(そむ)きても栄(さか)ゆる者(もの)を羨(うらや)み願(ねが)はぬ事

一 正直(しやうぢき)にして愚(おろか)なる人(ひと)をかろしめぬ事

一 遊びは長じ戯は言語に耽を
戯を見物とされ好む事
一 短慮なること嫉妬の心ふかく
人の嘲を恥ざる事
一 女の猿利根なりふるまひ事

事に就人を讒まする事
一 人の相中に讒を入る心あれ
怨を以て己を頼む事
一 衣裳道具美あまり美麗を
尽し飯料を費し身の程に過る事

一 貴賤(きせん)そしくの法のまゝを侮(あなど)りそれ氣随(きずい)我儘(まゝ)にふるまふく事

一 人の悲(ひ)をよろこび我(わが)楽(らく)を好む事

一 智(ち)ある人をあなどりおのれに慢ずる事

一 出家(しゆつけ)沙門(しやもん)に對面(たいめん)しげく
いかにも側(そば)ちかく召寄(めしよせ)る事

一 我(わが)分際(ぶんさい)を忘(わす)れて奢(おごり)ある事

一 驕(おごり)の心ふかく不足(ふそく)をかこつ事

一 下人(げにん)の善悪(よしあし)を辨(わきま)へず召使(めしつかひ)
仕(つかひ)やう面々(たく)にしてかたよる事

一 舅姑に疎末にあしく人の讒訴をかまふる事

一 継子に疎にして他人を嘲哢を恥ざる事

一 男をあなどり恣なる事

一 親類に親しからざる事

一 道を守る人を嫌ひ諂ふものを愛する事

一 人の心を知らず我不調法なる事

一 任我にして無礼なる事

一身の垢よりくれある紙
清(きよむ)る事
志此(この)條(でう)々常に心がけを
務べき事也女の心(こゝろ)ゆるし
珍(めづ)らしきのなきといへども

経からつく持べき事也
先(まづ)家(いへ)をも守り我ふべき心(こゝろざし)
淳(すな)朴(ほ)なりしく毎事に我(われ)
あとてゆす事は心を道(みち)へ
しそれ天(てん)を湯めてくれく

そも〳〵法(みち)なれば地(ち)は陰(いん)
にして和(やはら)ぐをもつて女の道(みち)とす
陰(いん)は陽(よう)に随(したが)ふ事天地(てんち)
自然(しぜん)の道理(どうり)なり夫婦(ふうふ)
のちぎりは天地(てんち)に准(たと)へて地(ち)た

夫(おつと)を天(てん)として敬(うや)すべし
尊(たつと)ふい古聖(?)列(すがい)ち天地(てんち)の理(こと)
也されば幼(いとけな)きよりも人を学
優(やさ)しき直(すぐ)なる心明(あき)らかに更(?)向
うやまい初(そめ)て手蹟(?)懐(こころ)づくへし

一しりぞける友(とも)にちかづく
屋のしる学技(がくぎ)ら勝れ才智(さいち)
北思(おもひ)ふ母陰(ちんぐ)わる人愚(ぐ)善悪(ぜんあく)
乃友(とも)にしたしみ以ての事
実(まこと)ある乃邪(じや)宴(こく)代に用ゐ

らく家(いへ)を治(をさむ)る婦(ふ)人と
云我事(こと)を好(この)み家(いへ)を破(やぶ)
ふ女無芸にして邪(よこしま)を
是(ぜ)とし能(よ)き人を恨
偽(つくろ)ふことの日(ひ)ごろ人の善悪(よしあし)

さとりのふかきにハ其人の
殊ニ勤しむ業を見て窺
む知るに及ふ由なれバ
誠に恥かしき事なるらん
必常に乱さず女ハ嫁しく

幸徳ある生れつきなきとても
えらびて心を用ひて朝夕
をとすれバ苦労をもいとはず
べし仁義礼智信の五常を
何れも人の行ふべき道

孝道ハ親と師人の教をも
在べからず男子ハ師ハ従
撰ミ是を覚れども女子ハ
其事あれ形ミ嫁て敢て
しむることならざれ夫女子ハ

ゆく嫁ぎて夫の家にゆきて貞
専ら舅姑ハ従ふる事ハ
礼バ親兄弟許に止る路の
うちあり私に参ずる教を
依る所ハ孝一之面に紅

粉黛粧ひ鏡を見るもえだ毎
心の闇を照して家人なす
唯平生嗜むべき義は言葉
忍くれく有これはつゞし聞く
貪ることなくは縦貧しくとも

後へことも厚からざる也
さと聡し心ならまれ文字
なく恵多く富めいふ哉
賢人は謙り嫌ひ遁し
縦引いるゝ人とぞ

むまれながら出来ても賤き

ともがらは凡人愛敬なかるべし

ては第一慈悲をこゝろがくべし

けのかれ善悪ともに知ら

れぬものなれば諸人の交はり

ろく書入ば善悪ともに文招く

ともに謙りて生れ付財

まのりひ出て御手を

あり今数多人へ借さ法ね

又は大唐日月の第一國と

氏子中

を照(てら)し紅(くれなゐ)のごとく豈散(ちり)や
慈悲(じひ)乃心を環(めぐら)して其(その)
小孫(こまご)に迄(まで)召使(めしつか)ふ我身(みづから)も
うへまでもあはれみ奴婢(ぬび)を
こゝろすゝしく憐(あはれ)まするときは人

なく善(ぜん)人の此世もなき事
これ是幼少(ようせう)よりの教(をしへ)に
よる所也素(もと)より世間(せけん)の胸(むね)を
謹(うや)まひて誠(まこと)の道(みち)を守(まも)るべし
まことに人の好む所や能(よく)慎(つゝし)み

諸禮大學

泥尾先生著
溪齋英泉画

絵入頭書 大本全一冊

幼きものハ白き糸のごとく善にも悪にも染り易きものなれバ友あしければよき生まれも悪くなりゆくのならひ行ハ是と世のならひなりさる故に早くより師にしたがひて物学せ礼義をよく会得させずバ身を立名を挙ることハなりがたし去れども今の世ハ子を思ふごく信切なる人少く師ハ稀なく杜撰の書のみ行はれてたまたま幼きものへも人の道にそむき礼なふしてひ職長くも不風不恭にして衆人にうとまれ恥をうることあど教への悪き故なるべしこゝに著す大学ハ諸礼よりこちなれたる臣ならども貴人に向ふべき行ひの仕様なると仮名文章に書てよく心得るべき事をとふまれ子どもにも読易く解しやすきやうにくはしく絵を加へ頭書にハ婦人の孝行忠信の伝を出し諸礼の図式をしるしてかくいとこまやかに載せたれバ年来とうしく学ばんにハ便りあることなし人の道をならひ覚えあつぱれ名誉の女子となるを師は教を受んよりハ早学びのちからと此書の一書の珍重広大なるを世にひろく知らせまほしく